

チャペルだより

第 215 号

2025. 9. 15

後期主題

「学ぶ尊さ」(詩編118編24-25節)

“The Value of Learning.” (Psalm 118: 24-25)

主題聖句

今日こそ主の御業の日。今日を喜び祝い、喜び躍ろう。どうか主よ、わたしたちに救いを。
どうか主よ、わたしたちに栄えを。

編集 広島女学院大学宗教委員会

〒732-0063 広島市東区牛田東4-13-1 TEL (082) 228-0386
<http://www.hju.ac.jp/> E-mail: hjucac@gaines.hju.ac.jp

「今日を喜び、学びに生きる」

大学宗教委員長・宗教センター長 栗津原 淳

魂を揺さぶられ、その世界に引き込まれるような物語に出会ったことがあるでしょうか。アメリカ先住民ラコタ族の神話的世界を描いたヘメヨースツ・ストーム『セブン・アローズ I 聖なる輪の教え』(阿部珠莉訳、地湧社、1992年)は、私にとってまさにそのような一冊でした。長老が物語や寓話を通して、子どもたちにラコタ族や他の部族に伝わる叢智や伝承、世界観を語り伝える内容です。

この本と出会ったのは、私が25歳のとき。とある地方の病院で診療放射線技師として働いていました。この本が直接のきっかけだったかは定かではありませんが、その後、私は定職を辞め、京都の学校で修士課程まで学び、さらにカリフォルニア州サンタバーバラ近郊のユング・深層心理学と神話の研究所へ進むことになります。思えば、心の奥底ではこの物語の「ジャンピング・マウス」が動き出していたのかもしれません。ここで、その物語を私なりの理解を交えて紹介します。

ジャンピング・マウスの物語

小さなネズミが、不思議な「音」を耳にします。仲間に尋ねても誰にも聞こえず、彼は変わり者扱いされますが、好奇心と勇気をもって音の正体を探す旅に出ます。やがて川やカエルに出会い、新しい視野を得て「跳ぶネズミ」と呼ばれるようになります。しかし、その体験を仲間に語っても理解されず、孤独を抱えながら「聖なる山」を目指して歩み続けます。

旅の途中、病んだバッファローに出会います。癒すには「ネズミの目」が必要でした。迷いながらも片目を差し出すと、感謝したバッファローが彼を山のふもとまで導いてくれます。さらに記憶を失ったオオカミと出会い、もう片方の目を与えます。完全に盲目となった彼を、記憶を取り戻したオオカミが「聖なる湖」へと導いてくれます。

湖のほとりに残された跳ぶネズミは、やがてワシにさらわれます。死を覚悟しますが、奇跡的に生き延びて視力を取り戻します。誰かの声に促されてジャンプすると、風が彼を大空へと運び、眼下には広大な平原が広がっていました。旅を通して、ネズミだった彼は世界を見渡す「ワシ」へと変容したのです。

この物語は、目に見えない「声」に耳を澄ますことから始まる霊的な旅、恐れや犠牲を越えた「成長と変容」の物語です。跳ぶネズミは、自分の「目=世界観や常識」を手放すことで、より広い視野と魂の自由を得ていきます。自分だけの「聖なる山」を信じて歩むこと、他者を助けるために差し出す勇気、そして失った先に開ける可能性が、詩的かつ象徴的に語られています。人生をかけて知識から「知恵」へと至る、魂の旅の物語といえるでしょう。

聖書の言葉と「今日の学び」

今学期の主題聖句である旧約聖書・詩編118編は、本来、イスラエルの民が大いなる困難ののちに神の助けを経験し、感謝と喜びをもって歌ったものといわれています。「今日こそ主の御業の日」とは、「いま、生かされていることそのもの」が神のなされた奇跡であり、恵みであるという信仰告白です。「今日を喜び祝い、喜び躍ろう」と続く言葉には、過去でも未来でもない、この瞬間に全力で向き合いなさい、というメッセージが込められています。

私たちは、広島女学院大学という学びの場に生かされています。「学び」には大きく分けて「知識」と「知恵」があります。この二つは似ているようでいて意味が異なります。知識とは事実や情報を知ること、学問や経験を通して得たデータを解釈することです。それに対して知恵とは、その知識を活かして適切に判断し、行動するための洞察力・判断力です。

知識はネットの世界にもあふれていますが、知恵は自らの経験と他者との関わりの中で培われます。成功も失敗も含めて自分の経験を振り返り、出来事の本質を洞察し、自分とは異なる他者の視点や意見に真摯に向き合うとき、知恵は養われます。また、ときには祈りや瞑想のように、静かに自分と向き合う時間も必要です。大学生活というかけがえのない時間の中で、知識にとどまらず「知恵」と出会い育てていくことを、今日も大切にしていきたいものです。

参考文献:

ヘメヨースツ・ストーム(阿部珠莉 訳)『セブン・アローズ I 聖なる輪の教え』地湧社、1992年
日本聖書協会『新共同訳聖書』

秋季宗教強調週間

講師

ミヤ ガワ シン イチ
宮川 眞一 先生

JOCS 元バングラデシュ派遣ワーカー JAFS (アジア協会アジア友の会) 理事
医療法人鶯友会牧病院医師(心療内科部長) 関西学院大学神学部卒業

プログラム

10月13日(月)～17日(金)は、秋季宗教強調週間です。

*10月14日(火) キリスト教の時間 13:00～13:45(砂本記念講堂)
「ともに生きるとは～バングラデシュでの医療活動を通して～」
ルカによる福音書10章29～37節
講師 宮川 眞一 先生

*10月15日(水) 特別講演会 13:00～14:30(砂本記念講堂)
「一隅を照らす・・・今の私たちにできること」
～NGO・海外医療協力の経験を通して～
ルカによる福音書10章29～37節
講師 宮川 眞一 先生

★講師を囲む懇談会 14:45～15:45(ゲーンズチャペルロビー)

*10月16日(木) 木曜日チャペル 12:30～12:50(ゲーンズチャペル)
「国際英語学科学生活動報告」国際英語学科2年 堀野 桃夏 さん

◆学内献血 10月27日(月) 受付 12:30～16:30(ヒノハラホール前)



ミヤ ガワ シン イチ
宮川 眞一 先生

愛媛県宇和島市生まれ。同郷の故岩村昇氏(元 JOCS ネパール派遣ワーカー)に影響を受け、海外医療協力を志す。関西学院大学神学部を経て徳島大学医学部へ進学、福岡徳洲会病院にて心療内科医に。2005年9月、JOCS ((公社)日本キリスト教海外医療協力会)ワーカーとしてバングラデシュへ赴任。2006年5月チャンドラゴーナ・キリスト教病院で活動開始。以後2期6年にわたる現地での活動を終え、2012年9月帰国。2013年3月 JOCS 退職後、地元愛媛に戻り、医療法人鶯友会牧病院勤務(心療内科部長)、現 JAFS (公社)アジア協会・アジア友の会 理事。



学生へのメッセージ

「行って、あなたも同じようにしなさい。」ルカによる福音書10章37節

何を如何に、而して何処へ

みなさんが、大学に入られてからというもの、ウクライナ・ガザを始め世界の様々な場所では、戦争や緊張状態が続いています。「正義」とは何なのか？私達は大学という学びの場にながら、今これらの問題をどう考え、どう行動すべきなのでしょう。

私は、かつてJOCS (日本キリスト教海外医療協力会)から派遣され、バングラデシュのチャンドラゴーナという町の病院で7年間働いてきました。それは幼い頃に、同団体の岩村昇というネパールで働く医師から、「みんなで生きる」こと＝「分かち合う」ことの重要性を教えられたからでした。

医師を志した当初、医学部の壁は厚く、長い浪人生活に疲れ、1度関西学院大学神学部で進路を検討することにしました。在学中に訪れたバングラデシュの悲惨な医療環境を目の当たりにして、自分は今「何を」なすべきか、その上で「如何に」アプローチすべきなのかを、じっくり考えて行動に移すことで技術も生きて来るのだと悟りました。

再受験を重ね医師となり、念願かなって帰ってきたバングラデシュの勤務地は、同国第2の大都市チッタゴンから山奥に入った丘陵地帯でした。そこには少数民族が多く住み、宗教的・政治的に複雑な問題が山積し、医療過疎の下、死に至る熱帯病のマラリアも蔓延していました。

私は、そこで「解」の無い貧困問題の下、日本なら死ななくてもよい多くの命と遭遇し、彼らと共に闘って参りました。今この国は1年前の政変から民主化に向けた試練の時代に入りつつあります。今回の講演では、これらの内容を、もう少し詳しく皆さんと「分かち合う」予定です。

さて、イエスは今回取り上げる新約聖書「よきサマリア人のたとえ」で、背伸びする奉仕を私たちに強いているのではなく、逃げ出さず「出来ることを、出来るところで、出来る範囲で」行うことこそが大切なのだと語っているのだと思います。勇気を出して苦しんでいる人と同じ側に共に生きようとする時、神は、その私たちにも隣人を与え、自らも傍に立ち、その場から、押し出してくれる。だからこそ、闇の中でも「何処へ」向かうべきかを示すわずかな光を私達は見つけ出し、それに向かって歩いてゆけるのだと思います。それは一人ではないからです。

今、私はJAFSという別のNGOで、ZOOMなどを使いながらミサイルで破壊されたウクライナの病院の復興支援の仕事に携わっています。これは在日ウクライナ避難民の1人の声から始まったプロジェクトですが、私達一人ひとりの「一隅を照らす」動きがバタフライエフェクトとなりつつあるのかもしれません。

みなさんも是非、自分の眼の前に、あなたの夢の光をともしてみてください。きっと何かが動き出すはずです。

学生エッセイ

アメリカ留学を振り返って

広島女学院大学 人文学部 日本文化学科3年

沖 紅音

2024年8月から2025年5月までの約9か月間、アメリカのオハイオ州にあるボーリンググリーン州立大学(BGSU)へ交換留学しました。大学入学当初、アメリカへの留学を考えていませんでした。しかし、授業で海外の文化などを学んだり、先生方から「学生のうちに海外へ行くのが良い」というアドバイスを聞いたりするうちに、海外に興味を持つようになりました。また、もともと異国料理を試すのが好きだったことに加え、高校時代には世界史や地理が好きだったこともあり、留学という貴重な機会を活かして、海外の文化や生活を直接体験したいと思い、アメリカへの留学を決意しました。しかし、楽しい留学までには、パスポートやクレジットカードの取得、TOEFLなど英語の勉強、VISAや健康保険の手続き、寮や授業の登録などのたくさんの準備がありました。初めての海外渡航だったため、知らないことが多く、インターネットで調べたり、先輩に聞いたり、準備だけでも新しく知ることが多く、勉強になりました。

慌ただしく始まったアメリカでの生活は、到着してから分からないことが多く、戸惑うことも多くありました。留学して数日が経ったある朝、朝食をとうろと大学内のレストランへ行ったのですが、カードの問題で会計ができず困ってしまいました。その時、後ろに並んでいた見知らぬ学生が代わりに支払ってくれました。全く知らない人だったので驚きましたが、異国の地でもこうして手を差し伸べてくれる人がいることに心が温かくなり、嬉しさと同時に、「ここでもきつとやっていける」と少し安心することができました。

私はこれまですべて英語で行われる授業を受けたことがなかったため、初回の授業には不安な気持ちで臨みました。そこで、各授業の先生方にその不安を相談したところ、「絶対に大丈夫、授業のことだけでなく、困ったことがあれば何でも聞いてね」と親身に対応してくださいました。その後の授業でも気にかけてくだ

さり、そのおかげで不安な気持ちもだいぶん和らぎました。私は英語だけでなく、ロシア語と古代ギリシャ語の授業も受けました。その他にも、日本語のチューターとして、日本語の授業を受けている学生の日本語を話す練習相手をしました。そこでは学生たちが間違いを恐れずに積極的に発音したり、問題に答えたりしていました。先生方もそうした挑戦を温かく応援しており、話しやすく発表しやすい雰囲気を作っていました。そのような様子を見て、英語も完璧に話さなくていいのだと気づき、話す勇気をもらいました。そして、自分の思いを伝えようとする気持ちこそが何より大切なのだと実感しました。

家族や先生方、職員の皆様、先輩、友人たちの温かい支えのおかげで、学びに満ちた充実した留学生活を送ることができました。本当にありがとうございました。この留学を通して、語学力だけでなく、挑戦する力や自分で考えて行動する力も身につけ、大きく成長したと感じています。留学を迷っている方はもちろん、そうでない方も、ぜひ一度海外に足を運んでほしいと思います。学生のうちに、異文化に触れ、多様な価値観を知ることが、かけがえのない経験になるはずです。ぜひその一歩を踏み出してください！

Итоговый экзамен - Final
Exam Results for Akane Oki

Score for this quiz: 118 out of 120
Submitted May 1 at 1:32pm
This attempt took 64 minutes.

Question 1

Comments Files (0) Rubric
32 Quiz Attempt 1

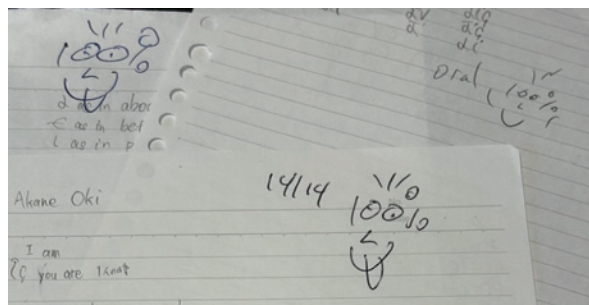
Elena Liskova
May 2, 2025 at 12:25 AM

Yanexia, Akane!
P.S. "Yanexia" is another way to say "Well done!" in Russian, it also means "smart person" :)



冬休みにフロリダのディズニーワールドへ行きました。

ロシア語試験の先生のコメント



古代ギリシャ語の先生が小テストで満点を取ったら顔を描いてくれるのが、嬉しかったです。



BGSUのモニュメントです。冬は雪が降って寒かったです。- 20℃の日もありました。

報告

8.6平和学習プログラム 開催報告

8月4日(月)から8月6日(水)まで「2025年度 第25回キリスト教主義大学ジョイント8.6平和学習プログラム」を開催いたしました。敬和学園大学、神戸女学院大学、本学授業科目「異文化理解入門」を受講する学生、教職員から参加がありました。

4日はゲンスチャペルにて開会礼拝・オリエンテーションを行った後、広島平和記念公園へ移動し、平和記念資料館を見学しました。また、希望者を対象に碑めぐり(案内人：本学総合学生支援センター事務課職員 松原 雅恵 さん)を行いました。5日は、本学の授業科目「ヒロシマと平和」において行われた、Duró Ágota(ドゥローアーゴタ)先生(本学准教授)、西河内 靖泰 先生(本学元特任准教授・本学非常勤講師)、松永 京子 先生(広島大学大学院人間社会科学研究科 准教授)の特別講義を受講し、また、本学院同窓生の塩冶節子さんより「被爆証言」を伺いました。その後は図書館で「栗原貞子記念平和文庫」他を見学し、夕方、参加の学生、教職員と懇親会(広島名物のお好み焼き)をもちました。

「原爆の日」となる6日は、広島女学院平和祈念式に参列後、振り返りと意見交換を行いました。

最後に栗津原 淳大学宗教委員長の閉会祈祷で本プログラムは無事終了しました。なお、Web「8.6平和学習プログラム特設サイト」にて関係資料を公開しました。

プログラム終了後お寄せくださった感想やご意見の中から、次のとおりご紹介したいと思います。紙面の都合で全ての方の感想を掲載することが叶わなかったことをご了承ください。

神戸女学院大学

心理学部 心理学科 1年

栄 郁実さん

平和記念資料館を見学したあと、碑めぐりをして広島市内を歩きましたが、そのように自らの足で動いて、自らの目で見ることでは得られない学びがあると痛感しました。液晶越しに見るのとは違うすぐ側にある展示物、生々しい戦争の遺産を目の当たりにして、直に見ることの重要さを感じました。特にそう感じたのは、元安川の傍を歩いたときです。原爆によって被爆した沢山の人々が川に入っていかれたというお話は伺ったことがありましたが、私の地元は、川の様子が広島とは異なるので、これまでは上手く想像ができませんでした。しかし、すぐ目の前にある穏やかな元安川の景色に、当時の状況を重ねて考えることで、その悲惨さが以前にも増してよく分かるようになりました。

講義については、被爆国日本の観点に留まらず多面的に原爆や核を見つめること、そしてその実態を、専門的な研究をなさっておられる先生方から詳しく伺えたことが私にとって非常に大きな学びでした。原爆・核について多様な学問的観点からお話を伺えるというのは、平和学などにあまり縁のない一般の大学生にとって大変に貴重な機会であったと感じています。今回のプログラムに参加することがなければ、アメリカ側の原爆の捉え方・主張や、アメリカやカナダ、コンゴなどのウラン鉱山の存在と問題、差別の実際と構造についてなど、知る機会もないままだったと思います。

ディスカッションでは、広島市内・市外・海外それぞれの原爆についての学習機会や取り組み方の違いを知ることが出来ました。実際にその場所に住んでいなければ、特に小中学校の平和教育の実際を知ることにはできないので、皆さんの経験を元に差異を見つけることができて興味深かったです。異なる県や地域で生きてこられた方とこ



のような繊細なテーマについて議論することは、普段はなかなかできないので、とても重要かつ有意義な交流でした。

敬和学園大学

人文学部 英語文化コミュニケーション学科 1年生

藤塚 かりんさん

実際に広島の地に足を運び、五感で感じることで書籍や動画で原爆について学ぶのとは違う、そこに暮らしていた人々の息吹を感じることができました。また、広島は韓国人やその他外国人労働者が多かったと初めて知り、自分の中で今まで日本人被爆者にフォーカスがいくばかりでしたが、それだけではいけないのだと気付かされました。そして、原爆の実態や戦争について関心のない同世代に対して悲観的にばかり捉えていました。しかし、現地で育ってきた学生の皆さんと意見交換をすることで、それを利用して色々知ってもらいやり方もあるのだと気づきを得ることができました。

広島女学院大学

国際英語学科 1年

(ミャンマーからの留学生)

NYEIN CHAN SHWESIN
ニェイン チャン シュエシンさん

There are three days our English Department students have to make a project for "Peace" that will be the 80 years anniversary for "Hiroshima Atomic Bomb Dome". On the first day, we had to visit "The Peaceful Memorial Park and Museum". It was my first time to visit right there. I was so excited to visit that museum. My friends are also excited to visit right there. They explained to me a lot about that place. I was so surprised when I got there. I saw the old Hiroshima and poor people who were stuffed from A-bomb and black rain and side effects. The park is there in memory of the victims of the nuclear attack on August 6, 1945, in which the United States dropped an atomic bomb on Hiroshima. I came to know the details about how they planned and designed the Hiroshima Peace Memorial Park. The location of Hiroshima Peace Memorial Park was once the city's busiest downtown commercial and residential district. The Park was built on an open field that was created by an explosion. Today there are several memorials and monuments, museums, and lecture halls, which draw over a million visitors annually. I learned about Sadako san and she was really the symbol of the children who suffered A-bomb. It was the best day and I cannot forget about the memories. When I phoned my mother and explained and shared about those things.

For the second day, August 5, we had a class and we learned a lot of things from the teachers and victims' guests. It was really hard for me. I listen to speeches but I try my best. I learned about nuclear and where uranium is and the world first explosion of Atomic - bomb. It was the best part of the speech for me. I also

got the name of the books and the movies which are related to the A - bomb. such as American Prometheus (2006), Ceremony 245, Fight Back, 1980. I like that teacher's speech among the others but the other speakers are also good and they can give a lot of information about their experience during that nuclear era, the history of Hiroshima before and after Atomic Bomb and the racism during humans. That day was also a priceless day for our students I think. We also learned that speech with the other students from the other university and I saw their enthusiasm for peace.

The last day of the project of studying peace was also on the anniversary of Hiroshima. August 6 got really full with the Atomic Bomb. Our students went to Hiroshima Jogakuin High School and prayed to the senior students, faculty and staff who lost their lives. I prayed to them and after that we made groups and discussed peace and how Hiroshima children learned peace from other places in Japan. I also shared my knowledge with them. So, all of the three days are priceless days for me. The project makes me interested in Peace. I want to show the world how peace is important for humans. The children were so poor during the war and wanted to stop the civil war in my country.

私たち広島女学院大学 国際英語学科の学生は、「平和」をテーマにした3日間のプロジェクトに参加しました。これは広島原爆ドームの80周年にあたる活動です。

1日目 — 平和記念公園と平和記念資料館の見学

初日は、広島平和記念公園と平和記念資料館を訪れました。私にとっては初めての訪問で、原爆で命を落とされた方々や、被爆の苦しみを生き抜かれた方々の思いに触れる貴重な機会となることを深く感じていました。友人も同じようにこの訪問を大切に思い、公園や資料館について丁寧に説明してくれました。実際に行ってみると、とても驚きました。展示では、原爆や黒い雨、その後遺症に苦しんだ当時の広島や人々の様子が紹介されていました。



平和記念公園は、1945年8月6日にアメリカが広島に原子爆弾を投下した際の犠牲者を追悼するために造られた場所です。私は、公園がどのように計画・設計されたのか、その詳細を知りました。この場所はかつて広島で最もにぎやかな商業・住宅地でしたが、爆発によって更地となり、そこに公園が作られました。現在は、多くの慰霊碑や記念碑、資料館、講堂があり、年間100万人以上が訪れています。

また、原爆で被害を受けた子どもたちの象徴である佐々木禎子さんのことも学びました。この日は忘れられない一日になりました。私は母に電話をかけ、そこで見たことや感じたことを話しました。

2日目 — 授業と被爆者の話

2日目の8月5日には、授業があり、先生方や被爆者の方々から多くのことを学びました。話を聞くのは少し難しかったですが、できる限り理解しようと努力しました。核兵器やウランの産地、世界初の原爆実験についても学びました。その部分が私には一番印象的でした。

また、原爆に関する本や映画の名前も知りました。たとえば『アメリカン・プロメテウス』（2006年）、『セレモニー 245』、『ファイト・バック』（1980年）です。特にある先生の講義が気に入りましたが、他の先生方も素晴らしく、核時代の経験、原爆投下前後の広島の歴史、人種差別の問題など、貴重な話をしてくださいました。

この日も、私たち学生にとってとても大切な一日になりました。他の大学の学生とも一緒に講義を聞き、彼女たちの平和への情熱を見ることができました。

3日目 — 8月6日、広島原爆の日

最終日は8月6日、原爆の日でした。広島の街全体が原爆の記憶で包まれていました。私たちは広島女学院中学高等学校を訪れ、命を落とした先輩たちや教職員の方々に祈りを捧げました。その後、グループに分かれて平和について話し合い、広島の子どもたちと他の地域の子どもたちがどのように平和を学んでいるかについて意見交換をしました。私も自分の知識を分かち合いました。

この3日間は、私にとって本当にかげがえのない時間でした。このプロジェクトを通して、私は平和に強く関心を持つようになりました。世界中の人々に、平和の大切さを伝えたいと思います。戦争中、子どもたちはとても貧しく、私の国でも内戦が終わるように強く願っています。



国際英語学科 1年

國弘 美友さん

今回、平和学習プログラムに参加して最も心に残ったのは、初日の平和資料館見学と碑めぐりです。平和資料館には小学生の頃から何度も平和学習で訪れており、展示内容も大きくは変わらないだろうと思っていました。ところが、その後の碑めぐりで、当時の住居跡が展示されている場所を訪れ、平和公園自体が当時あった家屋を埋め立てて造られたことを初めて知りました。一面が焼け野原になったことは知っていましたが、埋め立てられているとは知らず、とても驚きました。

韓国人被爆者を弔う慰霊碑を訪れましたが、亀形の慰霊碑は、韓国では「死者は亀の背に乗って天国へ行く」と言われていることから亀の形をしており、しかも亀は韓国の方向を向いています。日本人だけでなく、他国の人も慰霊していることの大切さを感じました。当時、韓国は日本の植民地だったこともあって、被爆後にも差別が続いたと2日目の講義で聞きました。それでも韓国人のための慰霊碑を建立するために尽力の方がいたことを思うと、その存在があまり知られていないことは、とても残念で悲しいことだと思いました。

また、朝鮮半島から日本に来て被爆した人々が、被爆後に母国へ戻っても原爆症の知名度が低く、別の病気と誤解されてしまうため、被害を隠して生きていかざるを得なかったという話を聞きました。手当も支給されず、誰にも打ち明けられないという状況は、絶対にあってはならないことですし、二度と同じ思いをする人を出してはならないと強く思いました。

今も世界各地で戦争は続いています。ロシアはウクライナ侵攻を三年も続け、つい先月にはタイとカンボジアで武力衝突があり、多くの民間人が犠牲になりました。高校生の頃は、戦争は遠い昔の出来事で自分には関係ないと思っていましたが、今ではそう思えることが体が平和な環境にいる証拠だと感じます。

3日目に広島女学院高等学校の生徒代表が「誰もが平和を願っているはずなのに、被爆から八十年経った今も世界は平和ではない」と語っていた言葉が印象に残っています。これほどの被害を出しても核抑止力を主張し核兵器を手放さないのは、現在、核兵器を保有する国が多いためだと思います。ナイフを持つ相手に素手では立ち向かえないから武器を持つ——その構図に似ています。本当に大人たちは過去から何も学んでいないのだと痛感しました。

自国の利益だけを考え、暴力で解決しようとする姿勢は、戦争といじめが紙一重であることを示していると感じます。大学生になり、大人に近づいている私たちだからこそ、今こそ真剣に平和について考え、行動していかなければならないと強く思いました。

国際英語学科 1年

楠野 彩空さん

8月6日のディスカッションでは、多くの学びがありました。中でも私が最も驚いたのは、広島市内と市外の学校で行われる平和学習に差があることです。わたしのグループにいた人の半分は広島市内の小学校出

身で、「アオギリの歌」をよく歌っていたため、前奏を聞いただけで曲がわかんと言っていました。しかし、私は「アオギリの歌」を全く知らず、一度も聞いたことがなかったので、とても驚きました。これをきっかけに覚えてみようと思いました。

また、平和学習の頻度にも違いがありました。広島市内の学校では、小・中・高の各段階で毎年平和学習が行われていたそうですが、私の場合は小学校ではあったものの、中学・高校では黙祷のみで平和学習は全くありませんでした。この点でも大きな差を感じました。

さらに、ミャンマー出身の参加者は、小学校で原爆について学ぶものの、事実のみであり、広島県内の人ほど詳しくは学ばないと話していました。また、大阪出身の参加者は、県外では日本全体に関する戦争については学ぶが、特別に広島に原爆に関する詳しい内容までは学ばないと述べていました。こうして県外や国外との間にも平和学習の差があることを知り、驚きました。

一方で、広島県内に住む人は広島に原爆について詳しいものの、長崎の原爆や他県での戦争被害についてはあまり詳しくないことにも気づきました。このことから、平和学習の内容や重点は地域によって異なり、それぞれに違いがあるのだと実感しました。

国際英語学科 1年

高田 玲海さん

初めて平和記念資料館をしっかりと見学し、改めて原爆の恐ろしさを実感しました。それと同時に、このように鮮明に伝えられているのは、思い出したくない過去をあえて語り継ぎ、二度と原爆が起こらないようにとの強い思いがあったからだと感じました。

資料館には多くの来館者がおり、その多さに驚きました。広島の人だけでなく、外国から訪れている人も大勢いました。当時の遺品や記録を、今こうして直接見ることができるのはとても貴重なことです。私は初めての見学だったので、一つひとつを時間をかけて見て回りました。展示には焼けた服や自転車、犠牲者の顔写真や名前が並び、原爆投下直後の様子を描いた絵もありました。その絵には、何が起きたのかわからないまま、ただ光る爆弾を見つめている人々の姿が描かれていました。

最初に見たのは、原爆投下と爆風の広がりを再現した映像です。自分の住む場所までは映っていませんでしたが、想像以上に広範囲に被害が及んだことがわかりました。さらに進むと、原爆の影響で橋の鉄骨が曲がり、道路に大きな溝ができた写真もありました。一撃で人だけでなく、街や生活の基盤をも壊滅させたことが伝わってきました。

中でも一番心に残ったのは「魂の叫び」という展示です。そこには被害者の遺品や当時の惨状を示す品々が並んでいました。その一つに「いってきますが姉との最後の会話でした。」と書かれたものがあり、最後には「今も行方不明です」と記されていました。その言葉を見たとき、本当に胸が締めつけられる思いがしました。私にも姉がいます。もし同じ状況になり、当たり前のように帰ってくると思っていた姉が帰ってこないまま行方不

明になってしまうことを考えると、普通に生きていけないと感じます。変えられない現実を前に、「あのときもっと話しておけば」「早く見つけてあげたかった」と、一生後悔するだろうと思いました。

私が祖父に「いってきます」と言うと、必ず祖父は「行って帰り」と返してくれます。以前その理由を尋ねたことがあります。すると祖父は「外へ行ったまま帰ってこないということにならないように、必ず帰ってきてほしいという意味だ」と教えてくれました。祖父も原爆の恐ろしさを知っているからこそ、何気ない言葉にも特別な思いを込めているのだと感じました。

国際英語学科 1年

中端 久瑠美さん

まず私は、平和記念資料館を見学し、原爆の悲惨さを改めて知った。私が通っていた中学校と高校は広島市から遠く、毎年平和学習はあったものの、原爆ドームや平和記念資料館を訪れる機会はなかった。そのため、小学4年生以来となる訪問だった。小学生の頃は、まだ深く考える力が十分ではなく、展示を見ても恐怖を感じるだけだった。しかし大学生になった今、改めて訪れてみると、恐怖だけでなく、さまざまな感情が湧き上がってきた。

まず感じたのは、小学生の頃と同じく「恐怖」だった。原子爆弾の爆風や熱線で吹き飛ばされた建物、血痕のついた衣服の切れ端、被爆者たちの写真、黒焦げになった三輪車など、被爆の痕跡を目の当たりにすると、その悲惨さが言葉で聞くよりもはるかに直接的に伝わってきた。

次に感じたのは「悲しみ」だった。特に佐々木禎子さんに関する展示では、その思いが強かった。佐々木さんは、クラスの皆に愛される元気な女の子だったが、2歳のときに黒い雨を浴びて被爆し、その影響で10年後に白血病を発症し、わずか12歳で亡くなった。彼女の死を悼み、同級生たちが募金を集め、『原爆の子の像』が建てられたという。生きたいと願いながらも命を奪われた彼女の事実に、深い悲しみを覚えた。そして、同じような思いをした子どもたちが他にも数多くいたことを思うと、胸が締め付けられる思いだった。

また、被爆者である塩冶節子さんの「被爆証言」を聞き、被爆した人々は原爆投下時やその後、どのような思いで生きてきたのだろうと考えさせられた。妹を失い、友人とも別れ、心身ともに深く傷ついた節子さん。もし自分が同じ立場だったら、悲しみに正気を保てないだろうと思う。節子さんは友人との別れを、涙声で何度も語っておられた。その繰り返しが、どれほど強く心に刻まれた出来事だったのかを物語っていた。

今回の平和学習を通じて、私は原爆の悲惨さを改めて知り、恐怖、悲しみ、やるせない感情を抱いた。この悲劇を二度と繰り返さないために、私たちは何ができるのかを考え続けていきたい。



2025年度 後期チャペル表 (2025年9月～2026年1月)

後期主題：「学ぶ尊さ」(詩編118編24～25節)

“The Value of Learning” (Psalm 118: 24-25)

月	日	火曜日「キリスト教の時間」 13:00～13:45 砂本記念講堂	司会	木曜日チャペル 12:30～12:50 ゲーンズチャペル
9	23	「賛美歌を歌おう」 ★聖歌隊 賛美歌のお話と歌唱指導 広島女学院大学オルガニスト 玉理 照子先生 (広島女学院同窓生、日本キリスト教団讃美歌委員)	粟津原	25 管理栄養学科 川邊 楊一郎 先生
	30	主題解説 「学ぶ尊さ」(詩編118編24～25節) 大学宗教委員長・宗教センター長 粟津原 淳 先生	粟津原	10/2 管理栄養学科 学生生活報告 「カレブプロジェクト報告」
10	7	創立記念礼拝(139周年) 院長・学長 三谷 高康 先生 ☆ゲーンズ学術奨励賞授与式	粟津原	9 児童教育学科 玉井 基宏 先生
	14 (火)	キリスト教の時間 13:00～13:45 (砂本記念講堂) 「ともに生きるとは～バングラデシュでの医療活動を通して～」ルカによる福音書10章29～37節 宮川 眞一(みやがわ しんいち)先生 (JPCS元バングラデシュ派遣ワーカー JAFS(アジア協会アジア友の会)理事、医療法人鶯友会牧病院医師(心療内科部長) 関西学院大学神学部卒業) 司会：日本文化学科宗教委員 一色 舞子 先生		
	15 (水)	特別講演会 13:00～14:30 (砂本記念講堂) ★聖歌隊 「一隅を照らす・今の私たちにできること～NGO・海外医療協力の経験を通して～」ルカによる福音書10章29～37節 宮川 眞一(みやがわ しんいち)先生 (JPCS元バングラデシュ派遣ワーカー JAFS(アジア協会アジア友の会)理事、医療法人鶯友会牧病院医師(心療内科部長) 関西学院大学神学部卒業) ★講師を囲む懇談会 14:45～15:45 (ゲーンズチャペルロビー) 司会：児童教育学科宗教委員 三桝 正典 先生		
	16 (木)	木曜日チャペル 12:30～12:50 (ゲーンズチャペル) 国際英語学科学生生活報告 国際英語学科 2年生 堀野 桃夏 さん 司会：大学宗教委員長・宗教センター長 粟津原 淳 先生		10月27日(月) ◆学内献血 12:30～16:30 ヒノハラホール前
	21	本学院同窓生からのメッセージ 山下 育美 先生 (動物愛護NPO SPICA 代表 本学卒業)	川邊	23 日本文化学科 柚木 靖史 先生
	28	JICA 国際協力出前講座 千田 成美(ちだ なるみ) さん (JICA 海外協力隊隊員 派遣国：マラウイ 職種：小学校教育)	三桝	30 生活デザイン学科 学生生活報告
11	4	鍵山 昌信 先生 (本学 人間生活学部生活デザイン学科准教授)	一色	6 経営企画室 為数 夏美 さん
	11	東区連携健康講座 川上 陽介 さん (ウィミズ・ヴィセオクリニック広島院長)	鍵山	13 国際英語学科 学生生活報告 4年生Nguyen ThanhTuyenさん
	18	清胤 祐子 先生 (浄土真宗本願寺派正覚寺坊守・安芸太田町教育長職務代行)	川邊	20 生活デザイン学科 熊田 亜矢子 先生
	25	三桝 正典 先生 (本学 人間生活学部児童教育学科教授)	一色	27 児童教育学科 学生生活報告 「夜の図書館実施報告」
12	2	中嶋 浩郎 先生 (翻訳家・元フィレンツェ大学講師)	鍵山	4 総務室 高橋千穂さん
	9	広島女学院大学人権週間 マーサ・メンセンディーク 先生(同志社大学社会学部社会福祉学科准教授)	粟津原	11 学生生活報告 「古典の世界をのぞいてみよう！ 報告」
	16	クリスマスメッセージ 近藤 紘子(こんどう こうこ) さん (被爆の語り部、日米共同制作劇映画「What Divides Us」のエグゼクティブ プロデューサー)	川邊	18 クリスマスコンサート 学生オルガニストによる パイプオルガン演奏
	23	クリスマス音楽礼拝 演奏：弦楽四重奏 A.O. カルテット ショートメッセージ：大学宗教委員長・宗教センター長 粟津原 淳 先生 献金ほか	粟津原	25 冬期休暇
1				8 卒業学年生による パイプオルガンコンサート
	13	「学生生活を振り返って」卒業学年生による感話 国際英語学科 山崎 有莉亜 さん、日本文化学科 古宮 明季 さん、 生活デザイン学科 廣畑 はな さん	粟津原	15 三谷 高康 学長

※ 「キリスト教の時間」 奏楽：大学オルガニスト 玉理 照子先生